

## 制作者研究〈テレビ・ドキュメンタリーを創った人々〉

### 【第4回】森口 豁（日本テレビ）

#### ～沖縄を伝え続けたヤマトンチュ～

メディア研究部 七沢 潔

#### はじめに

今年沖縄は本土復帰から40年を迎えた。沖縄の視覚イメージは藤田嗣治などの絵画、木村伊兵衛、岡本太郎、東松照明などの写真、今村昌平、東陽一、大島渚、森崎東などの映画によって繰り返し描かれてきた。亜熱帯の自然と風土が醸し出すエキゾチズム、かつて日本とは異なる独立王国だった歴史とアジア諸国との交流で培われた独自の文化。沖縄は1879年の琉球処分で日本に統合されたときから、すでに本土の人から「眼差される」対象になっていたともいわれる<sup>1)</sup>。

しかし県民の4分の1が戦死したといわれる沖縄戦を経て、日本が連合国軍による占領を脱した後も、沖縄を切り離して米軍統治下において1945年から72年までの27年間、沖縄は本土の人々にとって「イメージの空白地帯」となった。

この時代の1959年に、東京で生まれ育った22歳の若者が写真機を片手に那覇に移り住み、地元の新聞記者として取材活動を始めた。森口豁である。森口はやがて日本テレビの「特派員」となり、米軍の支配下の困窮の中で祖国日本への復帰を願う沖縄の人々の姿を、ニュースやドキュメンタリー番組で本土の視聴者に伝え続けた。一方、本土のメディアが本格的に沖縄報道を始めたのは、1965年に佐藤栄作が首相として初めて沖縄を訪ね「沖縄の祖国復帰が実現しない限り、日本にとって戦後は終わっていない」と声明してからである。

本土の新聞社やテレビ局は沖縄に「特派員」をおき、ベトナム戦争の前線基地として噴出する矛盾や、復帰に向けて揺れ動く様を伝えた。NHKも1965年からの8年間で「特派員報告」など79本の沖縄関連番組を放送している<sup>2)</sup>。

だがメディアの沖縄ブームは72年の復帰イベントが終わると急激に終息に向かう。15年間沖縄に住んで報道し続けた森口も、74年に日本テレビ東京本社へ転勤を命じられる。しかし森口は「沖縄問題は終わった」と「脱沖縄」に向かった多くのジャーナリストとは違った。その後も毎年のように沖縄に通い、番組を作り続けた。90年に日本テレビを退社するまでの30年間に森口が作った沖縄をテーマにした番組の数は28本にのぼる。

「ただの現在」<sup>3)</sup>であることを良しとしてきたテレビの制作者にとって、一つのテーマにこだわり、長年にわたって追求し続けることが困難であることを、現場で制作に携わってきた筆者は理解している。そのテーマに人々の関心が集まる時は良いが、無関心の時代の方が長く、その間周囲の目は冷たい。視聴率が重視される民間放送では尚更である。

森口豁はどのように沖縄と出会い、関係をむすび、描いてきたのか。その情熱は、なぜテレビ・ディレクターとしての現役を終えた今日まで、50年以上も持続されてきたのか。

一過性の報道に留まらず、テレビ・ドキュメンタリーと数多くの著作を通して沖縄を伝え続けた、稀有な制作者の足跡をたどる。



1937(昭和12)年、東京・世田谷で生まれる。中学生の頃から写真を撮りはじめ、将来カメラマンになることを夢見る。玉川学園高校3年のとき出会った沖縄出身の同窓生とともに、1956年に初めて沖縄を訪れ、祖国から切り離され米軍政下で厳しい暮らしを余儀なくされる同世代の若者たちと対面、衝撃を受ける。翌年には写真機をもって1か月間沖縄各地を取材し、58年には大学を中退、琉球新報社に入社して東京支社に勤務、59年に沖縄に移住、社会部の記者として活動する。その後「本土の人に沖縄の現実を知らせたい」と61年から日本テレビの通信員を兼務、自ら16ミリフィルムカメラを回してニュース取材を行った。63年に正式に日本テレビの「沖縄特派員」となり、牛山純一プロデューサーの指導で水不足にあえぐ久高島の生活を描いたノンフィクション劇場『乾いた沖縄』を制作。66年には基地の町コザの高校生たちの祖国復帰への思いと不安を描いた『沖縄の十八歳』を作り、その後、本土復帰を若者の眼差して見つめる作品を連打していく。復帰2年後の74年、日本テレビ本社に転勤となるが番組ディレクターとして沖縄に通い続け、NNNドキュメントの枠で放送した『ひめゆり戦史・いま問う国家と教育』(79年放送)、『島分け・沖縄 鳩間島哀史』(82年放送)などにより87年にテレビ大賞優秀個人賞、日本ジャーナリスト会議奨励賞を受賞した。1990年の日本テレビ退社までに55本のドキュメンタリー番組を制作、うち半数をこす28本が沖縄をテーマとする作品だった。退職後もフリーのジャーナリストとして沖縄を伝え続けている。

### 森口がディレクターなどをつとめた沖縄関連のテレビ・ドキュメンタリー番組

1963年(25歳)

ノンフィクション劇場『乾いた沖縄』 1963.07.19 モノクロ 30分  
牛山純一プロデューサーの指導で水不足にあえぐ久高島の暮らしを女性たちに焦点を当てて描いた処女作。

1966年(28歳)

ノンフィクション劇場『沖縄の十八歳』 1966.07.21 モノクロ 30分  
基地の町コザの高校生、内間安男が祖国復帰請願のため級友たちと戦没者慰霊行進に参加、複雑な思いを抱く。

1971年(33歳)

NNNドキュメント'71『かたき土を破りて』 1971.01.03 カラー 30分  
コザ暴動と背景にある裁かれざる米兵犯罪の実態、基地拡張に反対する住民たちの思いを描く。

NNNドキュメント'71『毒ガスは去ったが…』 1971.09.19 カラー 30分  
米軍による毒ガス撤去の一部始終を描きながら、基地の島の将来への住民たちの不安を伝える。

1972年(34歳)

沖縄復帰報道特番『沖縄・記憶からの出発』 1972.05.15 カラー 40分  
沖縄は「復帰」をどう受けとめているか。戦争体験者や基地労働者、若者らの苦渋に満ちた日々を報告。

NNNドキュメント'72『熱い長い青春・ある沖縄の証言から』 1972.08.20 カラー 30分  
『沖縄の十八歳』の主演・内間安男のタクシー運転手生活から見える復帰後も変わらない基地の島の現実。

1973年(35歳)

NNNドキュメント'73『島ちゃび結歌・沖縄八重山からの報告』 1973.11.18 カラー 30分  
人口減や医師不足など離島苦に苦しむ八重山の生活。人々を支えた結歌(ゆんた)＝労働歌と共に描く。

1974年(36歳)

NNNドキュメント'74『世乞い・沖縄鳩間島』 1974.04.28 カラー 30分  
本土復帰後も、水道も電気もない鳩間島。人口減少は止まらず、中学校も廃校になる島の行く末を憂う。

1978年(40歳)

NNNドキュメント'78『戦世の語り部先生・沖縄教研集会から』 1978.02.19 カラー 30分  
沖縄で開かれた全国教研集会。沖縄戦を生き延びた女性教師と戦後生まれの女性教師の対話から教育を考える。

NNNドキュメント'78『激突死』 1978.05.21 カラー 30分  
復帰1年後にバイクで国会正門に激突して死んだ沖縄出身の青年の軌跡を追い、その死の意味を問う。

NNNドキュメント'78『一幕一場・沖縄人類館』 1978.07.30 カラー 30分  
『沖縄の十八歳』の内間安男が劇役者として沖縄の苦難の近現代史を風刺豊かに演じ、復帰の矛盾を問う。

1979年(41歳)

NNNドキュメント'79『邦人歓迎します・コザ世替り情話』 1979.02.11 カラー 30分  
歌手・喜納昌吉など基地の街コザに生きる人々へのインタビューを通して大和世への世替りの様を描く。

NNNドキュメント'79『ひめゆり戦史・いま問う国家と教育』 1979.05.13 カラー 60分  
ひめゆり部隊の元学徒たちが戦争の醜さを証言、死地に向かわせたヤマトンチュの学校幹部の責任を問う。

NNNドキュメント'79『広場の戦争展・ある「在日沖縄人」の痛恨行脚』 1979.12.30 カラー 30分  
大阪に住む沖縄生まれの彫刻家・金城実が沖縄戦を描いた大レリーフをもって全国行脚するのに密着。

にっぽんレポート『さとうきびの花咲く島・沖縄この10年』 1979.12.30 カラー 30分  
リポーターとして森口がかつて取材した人々を訪ね、基地問題や経済状況など復帰後10年の実感を聞く。

#### 1980年(42歳)

NNNドキュメント'80『戦争を知っているか・芭蕉布織る村にて』 1980.08.10 カラー 30分  
沖縄戦最中、本島北部であった日本軍による住民虐殺の真相を被害者遺族らを通じて描く。

NNNドキュメント'80『空白の戦史・沖縄住民虐殺35年』 1980.11.02 カラー 30分  
住民虐殺に関与した元日本兵の謝罪の旅を追う。そこから見えてきたのは戦時下の日本軍の実像。

#### 1981年(43歳)

NNNドキュメント'81『ペラウの母は見た!沖縄・水俣の8日間』 1981.07.19 カラー 30分  
米軍基地と石油貯蔵基地の進出計画に揺れるパラオ諸島の沖縄・水俣の「学びの旅」を追う。

#### 1982年(44歳)

NNNドキュメント'82『島分け・沖縄 鳩間島哀史』 1982.05.16 カラー 60分  
人口減が進む鳩間島で唯一の小学生が離島、島外から新たに子どもを連れてくることに…。

NNNドキュメント'82『島分け・沖縄 鳩間島哀史Ⅱ』 1982.11.07 カラー 60分  
本島の養護施設から4人の子どもがきて鳩間小学校は廃校を免れたが、島の別れの歴史は終わらなかった。

#### 1983年(45歳)

NNNドキュメント'83『戦世の六月・「沖縄の十八歳」は今』 1983.07.10 カラー 30分  
戦争の記憶が蘇る6月に米軍の上陸演習…。内間安男は10歳になった長男らに平和の大切さを説く。

#### 1984年(46歳)

NNNドキュメント'84『海は哭いている』 1984.03.20 カラー 30分  
世界に誇るサンゴ礁の海、石垣島白保に降ってわいた県と市による新空港建設計画に地元は揺れる。

NNNドキュメント'84『あけもどろ・沖縄鳩間島10年目の春』 1984.05.27 カラー 50分  
復帰とともに廃校となった鳩間中学校が復活し、人口減に歯止めがかかるまでの10年の苦難の歳月を描く。

NNNドキュメント'84『海は哭いているⅡ・新石垣空港とサンゴ礁』<sup>㊞</sup> 1984.11.08 カラー 30分  
新空港建設予定地の白保は世界有数のサンゴ礁が広がる豊かな漁場。地元漁民は建設反対に動く。

#### 1985年(47歳)

NNNドキュメント'85『シリーズ「戦後40年」若きオキナワたちの軌跡』 1985.04.14 カラー 60分  
東京にある沖縄出身学生の寮・南燈寮に暮らしたOBたちの軌跡から、沖縄の戦後40年の歴史を見つめる。

#### 1986年(48歳)

NNNドキュメント'86『海は哭いているⅢ・サンゴの危機と市長選』<sup>㊞</sup> 1986.04.06 カラー 30分  
保革対決に空港建設反対を掲げる第3の候補が挑む石垣市長選挙を追い、空港の軍事利用の危険性に言及。

#### 1987年(49歳)

NNNドキュメント'87『沖縄15年目の夏・基地の村の若獅子たち』 1987.07.05 カラー 30分  
米軍上陸時の集団自決の記憶が残り、村ぐるみで基地に反対する読谷村の若者たちの意識を探る。

#### 1989年(51歳)

NNNドキュメント'89『昭和が終わった日・精神風景オキナワ』 1989.02.26 カラー 30分  
昭和天皇崩御の直後、写真家たちと同行して沖縄各地へ、人々の「昭和最後の日」への思いを見つめる。

\*森口豁ドキュメンタリー作品集『復帰願望—昭和の中のオキナワ』(海風社1992)の「森口豁 作品年譜」(P.466～467)をもとに作成。  
<sup>㊞</sup>は横浜市の放送ライブラリーで無償公開されている。

## 森口豁の主な著作

- 『ミーニシ吹く島から—極私的沖縄論』(アデイン書房1980)
- 『子乞い—八重山・鳩間島生活誌』(マルジュ社1985)
- 『沖縄こころの軌跡—1958～1987』(マルジュ社1987)
- 『最後の学徒兵—BC級死刑囚 田口泰正の悲劇』(講談社1993/講談社文庫1996)
- 『ヤマト嫌い—沖縄言論人 池宮城秀意の反骨』(講談社1995)
- 『「安保」が人をひき殺す—日米地位協定=沖縄からの告発』(高文研1996)
- 『沖縄 近い昔の旅—非武の島の記憶』(凱風社1999)
- 『だれも沖縄を知らない—27の島の物語』(筑摩書房2005)
- 『米軍政下の沖縄—アメリカ世の記憶』(高文研2010)
- 『沖縄写真家シリーズ「琉球烈像」第7巻 森口豁写真集 さよならアメリカ』(未来社2011)

## 沖縄との出会い

「あなたは沖縄の出身ではなかったんですか?」

本土復帰も終わり、1974年に東京の日本テレビ本社の勤務となった後も沖縄の番組提案を出し続ける森口豁に、同僚たちは口々に尋ねたという。

「ならば、なぜ(今どき)そんなに沖縄のことに夢中になるのか」森口は同僚たちの口にしたくない本当の疑問を察して耐えられなかったという<sup>4)</sup>。森口が耐えられなかったのは、そんな問いにさらされるほど一般市民やメディアの沖縄への関心が薄れた事実だった。しかし実際のところ、なぜ沖縄出身ではない森口が、生涯にわたって沖縄にこだわり続けるのだろうか。一つの鍵は彼の沖縄との出会い方にあった。

森口豁は1937年9月21日、東京・世田谷の梅ヶ丘で森口清と貞子の長男に生まれた。父親は私立幼稚園を営む傍ら演劇プロデューサーをつとめ、母親も戦前に暮らした上海で読書サークルに属し、作家の魯迅と親交を結ぶなど社会活動に熱心だった。家に画家や彫刻家、演劇人などが出入りする文化的環境で森口は育った。

森口は中学生のとき写真に凝りはじめ、将来カメラマンになることを夢見る。高校生になると地域の写真サークルに入って腕を磨いた。当時漁村だった千葉の浦安にでかけ、貝をとる漁師たちの生活取材、またインドからの留学生の日常もルポ。これらの写真は『アサヒグラフ』に掲載された。すでに社会派ジャーナリストとしての資質が表れていたようだ。

沖縄との出会いは玉川学園高校の3年生のときだった。同窓生に沖縄からの「留学生」金

城哲夫(1938-76)がいた。「留学生」と書いたのは、当時沖縄は米軍の施政権下にある「外国」だったからだ。金城は後にテレビのシナリオ作家となり、ウルトラマンシリーズの脚本を手がけた。その金城のすすめで1956年春、森口は級友たちと初めて沖縄に出かけ、2週間かけて南は糸満高校から北は辺土名高校まで回って地元の高校生と交流した。森口はこの旅で受けた人生を変える衝撃について、著書で次のように記している。

「どこの高校でも同世代の若者たちが熱いまなざしでほくらを迎え、トタン囲いの粗末な校舎のなかで日本から分断されたくもう一つの日本への哀しみといらだちを、まるで石つぶてのようにほくらに浴びせた。なぜ日本は沖縄を戦場にしたのか、なぜ施政権まで他国にゆだねるのか、なぜ軍事基地を押しつけつづけるのか、そして、日本人はなぜ沖縄に無関心なのか…。問いかけられるたびにほくらは居場所を失った。そのどれもが、元はといえば日本が沖縄に強いことなのに、まともに答えることができなかったのだ」<sup>5)</sup>

そして、その後仲間とつくった沖縄研究会のガリ版刷りパンフレット『観て来た沖縄』には「(あのときの)ピクッとする筋肉の伸縮を一生涯忘れる事はできません」と書いている。

森口はこの「筋肉が伸び縮む」ほどの衝撃について、後に「沖縄に生かされているながら、その沖縄のことなど何一つ知ろうとはせず自分中心に生きているほくら“醜い日本人”を発見したこと」に由来するもの、と述べている<sup>6)</sup>。

## 原罪意識という原動力

森口が自ら「原罪意識に目覚めた」というこ



の体験は森口の著作のそこかしこに顔を出す。そして、その後の森口の行動はこの「原罪意識」が原動力になっていったように見える。

沖縄から戻った森口は前述のパンフレットを全国の高校の生徒会に送るなど沖縄の現実を知らせる運動を仲間と展開、大学生となった翌57年にはカメラをもって沖縄を再訪し、1か月にわたり各地で写真を撮り、本土の雑誌に掲載した。この旅では沖縄中部の町のスラムに住む高校生たちと付き合い、米軍基地の建設現場や米軍のつくるダムに水没する集落も訪ねた。

この2度目の旅のあと森口は「＜沖縄＞のもつ重みは私の心とからだにのしかかって離れな」くなり、沖縄を忘れた本土が早く眼を覚ますために自分は何をすべきか—と考え、沖縄に移住することを決意したという。翌年、大学を中退すると、知人のついで琉球新報社に就職、まずは東京支社で働き、翌59年に沖縄に渡って社会部記者となるのである<sup>7)</sup>。

ところで、この琉球新報東京支社時代の思い出として森口は次のエピソードを記している。渋谷で旅館を営む沖縄出身の女将から電話があり、訪ねると沖縄から出稼ぎにきたばかりの男性がいて、鹿児島から東京までの汽車の中で、本土の女性にだまされ、有り金を全部持っていかれ困っていると打ち明けられた。人のよい沖縄人(ウチナンチュ)をだました本土人(ヤマトンチュ)への怒りに燃える女将は記事にしてくれという。森口はヤマトンチュとしての責任を感じて「身の置き場に困」り、なけなしの9,000円を男に渡してしまう。ところが後日、再び女将から電話があり、あの男性は詐欺師で、話はぜんぶ嘘、自分が渡した前借金も持ち逃げされた、と伝えられる。

この一件についての感想を森口はこう書いて

いる。「しかし何ら悔しくはなかった。(中略)男を騙したヤマト、つまり＜私＞の罪は全てを投げ出すに価すると思ったからであり、しかもそうできた自分がなぜかさわやかであったからだ<sup>8)</sup>。

沖縄とヤマトの現実や歴史を、一個人の身で贖えるのか、という疑問は当の森口にもあったらう。だがこの文章から、おそらく魂あるいは全身にまですり込まれたのであろう森口の強烈な「原罪意識」が、自分一人でも行動を起こして問題を解決に導くという強い意志につながり、半世紀にあまる沖縄との「つきあい」を決定づける重大な要因となったことが窺える。

## 新聞記者からテレビ局の特派員へ

テレビ制作者研究としての本稿の性格から、1959年から63年までの森口の琉球新報社会部記者時代については多くを語らないことにする。しかし、この時代に持ち前のフットワークと写真の腕を活かしてジャーナリストとして活動したことが、森口がその後テレビ・ドキュメンタリー番組をつくる基礎になったことは指摘できる。

たとえば1960年6月のアイゼンハワー米大統領沖縄訪問の日を捉えた一枚の写真。那覇の琉球政府前で赤旗をもって抗議する集団を警



～森口裕写真集『さよならアメリカ』より

察と米軍のMPたちが人垣をつくってブロックしている。抗議のプラカードには「ノーモア・ヒロシマ。ノーモア・ミヤモリ」と書かれている。「ミヤモリ」は前年に米軍機が墜落して多数の児童が死亡した石川市の宮森小学校事件への抗議である。森口はこの日、アイゼンハワーが嘉手納基地から那覇までパレードしたものの、押し寄せるデモ隊を恐れて、帰りはヘリコプターで逃げるように嘉手納に戻ったことを克明に覚えている。日米安保闘争の最中、この島の統治者が「背中を見せた」数少ない瞬間だった。こうした「シャッターチャンス」の積み重ねによって、森口が「基地の島・沖縄」についての考察を深めていったことは想像に難くない<sup>9)</sup>。

森口はまた、この時代から沖縄本島のみならず、離島にまで足を延ばしている。ライフワークの一つになった八重山諸島の鳩間島を初めて訪ねたのは1959年だった。米軍政下で、水もない電気もない離島の暮らしの厳しさに触れ、それが本土復帰によってどう変わるのか、その後の視座が形成されていったのである。

1961年、新聞記者として「燃えるような青春」を疾走していた森口に転機が訪れる。春休みに東京に戻った森口は在京の民放各社を回り、自分を通信員として雇わないかと売り込んだ。その頃、本土の大手メディアは沖縄に記者を常駐させておらず、沖縄タイムズの記者が朝日新聞、琉球新報の記者が毎日新聞など、契約により地元の新聞記者に通信員の業務を委託していた。

森口は「沖縄の苦しみを本土の人々に伝えて復帰を早める」という志を果たすためにも、本土のメディアで報道することが大切だと、このとき考えるようになっていたのだ。

森口の提案に各社の反応は好意的だった。

なかでも、すぐにお金を出すと具体的に動いたのが日本テレビだった。森口は契約してお金を受け取ると基地の町コザにあるTAXフリーの店でアメリカ製の16ミリフィルムのカメラを買った。こうして森口のテレビニュースの取材が始まった。当初はカメラ本体しかなく、音声機材も照明もない状態が65年まで続いた。63年に正式に日本テレビの特派員となり、最初のテレビ番組を撮るときには、夜の場面の撮影に必要な照明機材を琉球放送の友人がこっそり貸してくれたという<sup>10)</sup>。



特派員時代の森口豁（1969年嘉手納基地で）

## 処女作『乾いた沖縄』（1963年放送）

ここからは森口が作ったドキュメンタリー番組を紹介しながら論を進めたい。処女作で、本人が最も好きな番組というノンフィクション劇場『乾いた沖縄』（1963年7月19日放送）は、80年ぶりの大干ばつの中、水不足に苦しむ久高島の生活を描いている。日本テレビの牛山純一がプロデューサー、構成作家に早坂暁、森口は自ら16ミリカメラを回してディレクターをつとめた。

番組冒頭、地底深い島の共同貯水場で女が水をすくい上げ桶に入れる。その音が洞窟に響き渡る中、「久高島は女の地獄。水の重みで足が萎え、腰は曲る」とナレーションが始まる。男たちが出稼ぎで島を離れる久高島では女は畑仕事をして子どもや老人を養う。だが、雨が降らないため地面は割れ、作物は育たない。日中40度を超す暑さの中、女たちは労賃を稼ぐため道路工事現場で働く。つば広の作業帽の上にのせた籠に砂利を入れ、浜から内陸の道路へと運ぶ。苦しい表情のアップ、太陽はまるで炸裂した原爆のようだ。そして圧巻は夜。女たちは地下洞窟への階段で眠気と戦いながら順番待ちをし、柄杓で水を桶に汲んでは家へと運ぶ。

昼も夜も、女たちが砂利や水を頭にのせて運搬する場面に圧倒的な力がある。女たちの顔のアップの連続が、場面に緊張感をもたせているのだ。



ノンフィクション劇場『乾いた沖縄』

(以下、番組名の付いた写真は日本テレビの放送画面より)

こうした劇的な表現は、すでに「ノンフィクション劇場」を立ち上げ「映像のドラマトウルギー」を追求してきた牛山が森口に指示した撮影方法だと思われる。当時は本土から沖縄に来るためには米軍の許可が必要だったため、森口は電話局に足を運び国際電話で東京の牛山と打ち合わせをしたという。

一方、ナレーションには森口らしい「のめり込み」が現れている。要所で取材対象の心情が乗り移ったかのごとく、「だけど泣くまい、今泣いたとて、この苦しみは消えはせぬ、消えはせぬ…」とか、「女たちは、その(雨乞いの)祈りの空しいことを知っている。だが祈るよりほかに何が残っているのだろう」と心を震わせる。今日の番組制作者も登場人物の心情を代弁するコメントを多発するが、その中途半端な寄り添い感とはまったく別次元の、「憑依された」が如き対象との一体感がこの番組のナレーションにはある。

最後の場面は枯れ果てた畑に黙々と鍬を入れる老女のアップ。語りは「だが、もう一度種を播くんだ。苗を植えるんだ。久高の女は、そうやって生きてきた。沖縄の女は、そうやって生きていかななくてはならないのだ」。島の女たちと一心同体化しながら、励ますように声を投げかけている。

『乾いた沖縄』の本土での評価は高く、プロデューサーの牛山はこの成功を土台に同じ年に、やはり水不足に苦しむ八重山の黒島を舞台にしたノンフィクション劇場『水と風』を制作する。牛山が自らディレクターとなり、森口もコーディネーターとして参加したこの作品は、のちにカンヌ国際テレビ映画祭特別賞を受賞したが、問題も抱えていた。まず『乾いた沖縄』放送後、米軍から「これは反米的で好ましくない番組だ」とクレームが届いた。そして森口にはアメリカ民政府公安局の尾行がつくようになった。それが黒島に入った牛山のチームにも災いした。牛山チームは公安局に取材先すべてを調べられ、厳しい干渉を受けた。理由は「アメリカは沖縄住民をこんなに苦勞させている、というイメージを日本で放送されると、共産主義者に利用される」というものだった。

この件は牛山の粘り強い交渉で打開し、『水と風』はなんとか放送に漕ぎ着けた。だが、もう一つ問題が残った。『乾いた沖縄』も『水と風』も沖縄では放送されなかったものの、島の出身者が本土で見て激しい抗議の声を寄せた。「なんで歌や踊りなど良い面は紹介せずに、貧しい暮らしばかりを強調するのか」つまり「島の恥をさらすな」という抗議だった。

このことは森口の中に波紋を投げかけた。これ以降「撮る側」と「撮られる側」の関係について、森口は深く考えるようになる<sup>11)</sup>。

## 若者の眼差しから見た本土復帰

米軍基地の問題は、森口が沖縄に渡る動機を形成した最大の関心事であり、「本土復帰」の真価を問う際の核心にある問題である。森口はこのテーマで9本の番組を作っている。しかし、この問題にアプローチするとき、森口は決して大上段の構えは見せない。日常のニュース取材で撮った映像をつないだNNNドキュメント'71の『かたき土を破りて』や『毒ガスは去ったが…』を例外として、最初から番組として立ち上げるときは、人間、それも若い沖縄人を主人公として、その行動に寄り添いながら、彼らの眼差しを通して生活を支配する基地の重圧を見つめようとしてきた。基地の影響を外形からではなく、そこに住む人間の内部に入って測ろうとした、とも言い換えることができる。

### 『沖縄の十八歳』（1966年7月放送）

その代表的な事例が1966年に放送された森口の2作目のテレビ番組、ノンフィクション劇場『沖縄の十八歳』（1966年7月21日放送）である。この作品の主人公、内間安男は極東最大

といわれる嘉手納空軍基地に隣接する町コザに住む高校生。歓楽街で米兵の落とすドルに群がるように人々が暮らす街では米兵による犯罪が絶えず、売春も日常化している。そんな環境下に暮らす内間は、自宅の壁に「悲願祖国復帰」と墨書した日の丸を張るほど、熱烈に本土復帰を願っている。

番組の冒頭に森口は米軍政下の沖縄の暮らしを象徴する場面を配している。毎日の習慣として主人公が朝起きると庭にある井戸から水を汲み、顔を洗うのである。離島はもちろん、沖縄本島でも上水道、下水道は完備されていなかった。頼るのは井戸水や天水。水というライフラインの欠如こそ、米軍による統治の人権軽視ぶりを象徴していることを、森口はさりげなく示している。

さて、番組の主人公の内間安男は沖縄戦の「玉砕記念日」（今でいう「慰霊の日」。この当時はまだ日本軍が主語の戦争観が支配的だった）に那覇から摩文仁までの約20キロを行進する「慰霊と平和の行進」に仲間たちと参加して、自分たちの祖国復帰への思いをアピールしようとしている。

この番組の見どころは、当時本土の人にはほとんど窺い知れなかった沖縄の高校生たちの祖国・日本への複雑な思いが、赤裸々に描か



ノンフィクション劇場『沖縄の十八歳』



れていることである。「行進」に参加する前日、内間は高校のホームルームで祖国復帰をテーマに議論を仕掛ける。すると42人の級友の中で祖国復帰を主張したのは28人、残りの14人つまり3分の1は祖国復帰に疑問を投げかけた。その理由は、一足先に復帰した奄美諸島の人々が本土に出稼ぎに行き差別されていること、復帰するとアメリカの援助や「基地経済」がなくなることへの不安だった。

この疑問は「行進」に参加しない級友を内間が家まで行って説得する場面でさらに色濃く提示される。その級友は、サンフランシスコ講和条約を結んで日本が1952年に独立した際に、沖縄の人に相談せずに沖縄を切り離したことを持ち出し、「(それから)20年も経っても何もしないというのはひどいと思うんだ。そういう祖国なんてさ、僕は欲しくないよ、全然」。

森口はこの級友の発言を番組の「肝」と考えていたのであろう。その発言の後、級友と別れて内間が立ち去る場面に音の何もない空白を22秒間置いている。業界用語で「ノンモン」とよぶこの音の空白は、慰霊行進の場面に入って再び一瞬現れ、級友の言葉の続き、「果たしてそれが僕たちの祖国であるか、疑い深いと思うんだ」が、音声オンリーで挿入される。

「ノンモン」は番組後半、摩文仁の戦没者追悼式典の来賓の衆議院議長に内間たちが用意したアピールの手紙を手渡す場面でも41秒間現れ、議長が黒塗りの車に乗り込んだ直後に、前述の級友の言葉がリフレンされる。

内間たち行進に参加した高校生たちは、精魂込めてガリ版刷りした文書を手渡しても、そっけなく立ち去る衆議院議長の姿から、この級友の言葉が杞憂ではないことを感じ取る。そして見渡せば、摩文仁の丘には沖縄の人々の思

いは無関係に、本土の各県ごとに旧日本兵の戦死者を弔う巨大な慰霊塔が立ち並ぶ。

ここまで見ると、この番組の基盤はその10年前、初めて沖縄を訪れ、同年代の高校生から祖国日本への不信の思いを「石つぶて」のように投げられ衝撃を受けた森口の「原罪意識」と、それに基づくトラウマ的な記憶の回帰であることに気付く。ただしその提示の仕方は、率直に「沖縄を本土の懐に抱き戻そう」と訴えた10年前とは違う。森口は番組の最後を「沖縄が祖国から切り離されて21年。いつか祖国の私たちが沖縄と共に生きようとした時、彼らは、私たちの手の届かない遠い道を歩んでいるにちがいない」と結んでいる。沖縄に移住して7年、人々の暮らしの中に入り、本土に対する複雑な心象の機微を感じ取り、心に刻んだ結果が表れているように思われる。そしてその沖縄人の「複雑な機微」は、沖縄が本土に復帰してから、次第に重みを増していくことになる。

1972年5月15日午前零時、沖縄の施政権がアメリカから日本に返還される瞬間を森口はコザで迎えた。そのとき米軍基地ゲートを学生集団が襲撃するという情報を聞いて、念のため足を運んだのである。結局その瞬間はコザ市役所のサイレンが鳴り、車のラジオから船の汽笛が流れただけだったが、森口はそれまで沖縄に君臨したアメリカ国務長官代理の琉球列島高等弁務官を乗せた専用機がその10分後に飛び立ち、島を去るときの爆音を聞いている<sup>12)</sup>。

### 『熱い長い青春』（1972年8月放送）

その年の8月、『沖縄の十八歳』シリーズの第2弾が放送された。NNNドキュメント'72『熱い長い青春・ある沖縄の証言から』（1972年8



NNNドキュメント'72  
『熱い長い青春・ある沖縄の証言から』

月20日放送)は、高校を卒業してタクシー運転手となった内間安男の毎日を通じて、本土復帰後も何も変わらない基地の島の現実を描いている。那覇空港には日本航空の旅客機が着陸し、多くの観光客がタラップを降りてくるが、目にするのはすぐ真近で発進する米軍の戦闘機。その向こうの丘には核弾頭搭載可能な中距離ミサイル、ナイキ・ハーキュリーズが聳え立つ。

第2弾は前にも増して音声にまつわる技巧が施されている。内間が運転するタクシーから見えるのは米軍基地の金網が延々と続き、歓楽街へ米兵が繰り出す相変わらずの島の風景。そこにカーラジオからいろいろなニュースが聞こえてくる。お盆の間米軍は墓参りのための基地内への出入りを許可する、復帰後の米軍への給水状況について、復帰後の売春業者の実態、軍用地の再契約の状況について…。

道では米軍のトラックがタクシーにぶつかるが米兵はタクシー運転手に謝ろうともしない。内間は毎日のようにこうした風景を見て怒りをため込んでいる。本土復帰すれば基地はなくなると思っていたが、何も変わらなかった。復帰後も飛来する米爆撃機B52に抗議する集会にも参加するが、一方で乗客を得るために基地の

ゲート前で米兵を待つ。そんな自分にいらだちも感じている。

24歳になった内間安男は高校の同級生と結婚して、奥さんはじきに子どもを出産しそうである。また彼は、父の死後、女手一つで家庭を切り盛りしてきた母親と、本土に就職した兄の子どもたちの面倒もみている。沖縄では普通の家族の風景と身近なところでも本土への出稼ぎが始まっている現実が、何気なく描かれている。またタクシーには本土からの観光客も乗ってくる。こうした小さな点描の積み重ねによって番組に復帰で微妙に変わる生活のディテールが組み込まれてゆく。最後は内間夫妻が浜辺でギターを弾きながら「夜明けにむかって二人で歩こう」と歌う場面。生まれてくる子どものためにも現実の中で何とか前を向いて生きていかなくてはならない、という森口と内間の共同のメッセージになっている。

#### 『一幕一場・沖縄人類館』(1978年7月放送)

森口は後に内間安男を主人公とするこの『沖縄の十八歳』シリーズについて、「作品の作り手である僕自身の自画像だった」「あたかも内間安男の映し鏡のごとく作品にわが思いを投影してきた」と告解している<sup>13)</sup>。

筆者の目から見ても、少なくとも森口は第2弾までは内間安男という青年を通して沖縄と「共犯関係」になろうとしていたように見える。それは「原罪」を負ったヤマトンチュとして「自分の居場所はない」が、それでも「沖縄と連帯する」という初志を貫こうとする森口の「背骨」である。

だが、6年後のシリーズ第3弾、NNNドキュメント'78『一幕一場・沖縄人類館』(1978年7月30日放送)は趣を異にする。森口の言葉によればこのときの内間安男はかつての「本土指

向一直線」ではなくなっている<sup>14)</sup>。「被害者意識や劣等感と決別し、『映し鏡』である僕をも乗り越えた」存在になっていたとまでいう<sup>15)</sup>。



NNNドキュメント'78『一幕一場・沖縄人類館』



同上 コザの街を歩く森口(左)と内間

内間と森口に一体何が起こったのか番組から考えてみよう。このとき内間安男は30歳、コザのアマチュア演劇集団「創造」の役者となっている。舞台上演じるのは明治時代に大阪の勧業博覧会で沖縄、台湾、朝鮮、アイヌの人たちが見世物として陳列された「人類館事件」を題材にした戯曲。ヤマトの沖縄への差別感が露骨に表れたこの事件の戯曲を書いた知念正真、演出の幸喜良秀は「くしゃみするのも標準語で」といわれるほど、明治以降、日本との同化に突き進んできた沖縄の哀しさと可笑しさ、悲劇的な歴史を風刺でつつみ込み、苦笑いを誘う舞台に仕立て上げている。内間は軍

人のような制服制帽でムチを振るう調教師役となって、見世物となった沖縄の男女を蔑み、方言札をつけさせ、沖縄戦最中には住民に集団自決を迫る日本兵に変身、戦後になると祖国復帰をすすめる教育者にも扮してユーモアで会場を笑いの渦に包む。この劇は、かつてアメリカやヤマトに向けられていた刃を、ヤマトに「隷属」してきた沖縄と沖縄人(ウチナンチュ)自身に、「自嘲」という形で向けているのである。

番組中、劇団「創造」のリーダーで演出家の幸喜は語っている。「復帰運動の中で外へ向かっていた眼が自分の内部へ、ウチナンチュとは何だろう、僕自身は何だろうと問いつめるような作業を70年からずっと(続けてきた)。(中略)今まで語りえなかった自らの恥部みたいなものを(中略)もう一度見つめ直して否定しなければ、本当に私たちの誇れる沖縄、あるいは沖縄人というのは新しく創り出し得ない」。

この頃内間安男は言った。「歴史はくり返すって言いますよね。ウチナンチュが目覚めなにかぎり沖縄は変わりゃしない。いつまでも騙されてはいけません。『いいニッポン人』になる必要なんかないですよ」<sup>16)</sup>。内間は高校時代の恩師でもある幸喜とともに演劇活動に打ち込むことで、歴史によってつくられたヤマトと沖縄の間の<断層>を意識するようになったのである。そんな内間の姿を森口は一抹の寂しさとともに受け入れようとしていたのではないだろうか。

ところで、この番組が放送されたタイミングは、沖縄で国による最後の復帰処理事業である「交通方法の変更」(通称730)が行われた1978年7月30日当日である。すなわち戦後「人は左、車は右」だった交通ルールを、真逆の「人は右、車は左」に総額215億円かけて変える大作戦が行われたその日である。琉球処分以来、

繰り返し「右向け、右」と言われてきた沖縄に再び国家に従属する儀式が行われるその日に、森口はこの「沖縄人類館」の舞台と思想を取り込んだ番組をぶつけている。その意図はどこにあったのだろうか。

内間が扮する調教師は劇の最後にあたかも沖縄を象徴するような芋を見つめながら「何というグロテスクな面構えをしているのだ。せめてお前が、リンゴやナシのような愛らしい形をしていたならば、沖縄の歴史もまた、変わっていたかも知れないものを…」と言って一度はかぶりついた芋を地面に叩き付ける。すると凄まじい轟音とともに爆発し、調教師は死んでしまう。

偶然のなせる業に見えて、「自爆」にも見える皮肉な結末は、劇作家が用意したもので、森口の作意によるものではない。だが偶然とはいえ、この結末とシンクロする悲劇を、この番組のわずか2か月前に放送された森口の番組の中に見い出すことができる。

### 『激突死』（1978年5月放送）

森口の代表作の一つに上げられるNNNドキュメント'78『激突死』（1978年5月21日放送）は、本土復帰から1年がたった1973年5月20日に国会議事堂正門の鉄柵にオートバイにのって激突し即死した沖縄出身の26歳の青年、上原安隆の軌跡を追い、その死の理由に迫っている。上原は沖縄本島中部の恩納村喜瀬武原おんなそんきせんぼるに生まれ育った。そこは米軍が激しい実弾演習を行い、戦車や装甲車が我が物顔に跋扈するところ。上原は幼くして父が他界、母の手一つで育てられ貧しかったため、高校を出るとコザに出て米兵相手のバーの従業員となった。踊りが上手で人気者だったが、1970年、米兵によるひき逃げ事件に端を発したコザ暴動が起きると

アメリカ兵の車に放火した容疑で逮捕された。

上原はその後本土に出て、様々な仕事をへて川崎でトラックの運転手として働くようになるが、あるとき脱輪事故を起こしてから情緒が不安定になった、と同じアパートに住んでいた同僚が証言する。夜中に急に裸足のまま飛び出して行ったり、長かった髪をばっさり切ったという。別の同僚は、上原は絵を描き、音楽や読書を愛するもの静かな青年だったが、誰かが沖縄の悪口を言うとおちまけるように怒ったという。「もっと勉強しなくては」とか「政治がなっていない」と口にしていたという。上原には双子の兄・安房やすふさがいた。安房は上原の死後、死亡現場の国会議事堂正門や、上原の住んでいたアパートを訪ねている。アパートの本棚にあった『孤立無援の思想』<sup>17)</sup>という本のタイトルが気になったという。安房は弟の死は事故死でも、単なる自殺でもない。決して犬死みたいな死に方ではなかった、と言う。つまり、国会という場所を選んでの抗議の自殺、それも沖縄の本土復帰をもてあそび、復帰後も変わらない基地の島の矛盾を見て見ぬふりをしている本土の政治家たちへの、命を棄ててのプロテストだと考えて



上原安隆が被っていたヘルメット  
～森口豁写真集『さよならアメリカ』より



いる。それはまた森口の思うところでもあった。

番組のリポーターをつとめた沖縄のフォーク歌手、うみせどゆたか海勢頭豊は歌う。「騙されつづけた古里の悲しみを 新しい明日の沖縄の悲しみを つくらないために一人で闘った…」。

基地によってあらかじめ居場所を奪われ、流転の末に、遺書も残さずに26歳で国会に激突死した上原安隆。上原の話をする森口は75歳になったいまでも、人目をはばからず涙を流す。森口は、「沖縄の人は誰かが不幸になったとき、けして『気の毒』『かわいそう』といった、人を見下ろすような、上から目線の言葉は使わない。『肝苦りや』といい、人の痛みを感じて自分も心が苦しいよ、と表現する」と言う。そしてまた、自らが傷つけられた場合でも、責任を問うべき相手を攻撃する言葉を発することができず、ため込んだ、行き場のないエネルギーで<自爆>するように自らの身を傷つけてしまうというのだ<sup>18)</sup>。

上原と同世代の沖縄の映像批評家・なかざといさお仲里効は、ヤマトンチュでありながら、沖縄の青年の心の陰影を凝視する森口について、「対話の言葉の間に潜む<……>/沈黙の声を聴き取る耳と行間を読みとる目をもつ数少ないテレビディレクター」と評している<sup>19)</sup>。

『激突死』ではヤマトから押し付けられた矛盾を背負った沖縄青年が、追い詰められた末に本土復帰の求める「隷属」に抗して命を棄て、「自爆的抵抗」<sup>20)</sup>を選んだ。『一幕一場・沖縄人類館』では、劇中行為とはいえ、幕切れで「自爆的抵抗」が暗示されている。そして、その劇を入れ込んだ番組の放送日を、森口は「交通ルールの変更」というヤマトへの新たな「従属」が発効する日に設定した。森口はこのとき、かつて日本とは異なる国であった沖縄の民が、<皇民化>の果てに戦時<集団死>にまで追い込まれた。そ

の歴史ゆえに、復帰が求める「同化」に抵抗する一つまり沖縄人が「異化」に向かう<道理>を浮き彫りにしようとしたに違いない。

まるで内間安男の進化に呼応するように、森口豁もまた、それまでのストレートなく祖国復帰願望>とは一線を画した、歴史軸を加えた「認識の重層化」を行っていたのである。

## 沖縄という鏡に映る日本の姿を描く

内間安男を主人公とする『沖縄の十八歳』シリーズには第4弾としてNNNドキュメント'83『戦世の六月・沖縄の十八歳』は今(1983年7月10日放送)があるが、本稿では詳述は割愛して、1978年に森口豁の番組に起こった沖縄をめぐる「認識の重層化」について考察を進める。

森口にとって1978年の2本の番組は、74年に東京に転勤してから4年後に制作した番組である。東京転勤前に作られた8本の番組に比べて、取材対象との関係の仕方、さらにいえば沖縄との関わり方の角度が微妙に違っている。沖縄に居を構えて、沖縄と「一心同体」になって本土にむけて沖縄の現実を伝えるというスタイルに、沖縄で起こる問題をつぶさに見ながらも、それが日本にとってどんな意味をもつかを考える視点が加わったといってもいい。森口自身も1984年に琉球新報の連載記事で「<沖縄>を見ることによって<日本>を識る方向へ私のテーマは転換している」と記している。

それは東京本社に転勤後に「いつまで沖縄にこだわるんだ」と上司や同僚に言われ、「日本赤軍」や「小笠原」「スモン病」「原発」などをテーマに番組を作り、視野を広げたことも影響しているかも知れない。他方で1980年の著書『ミーニシ吹く島から一極私的沖縄論』の中

で「＜沖縄問題＞と総称される問題のどの問題ひとつとっても、沖縄の内側から起こってきた問題ではない」と喝破したように、沖縄に現れた矛盾の根源を追い求める志向性が強まったと見ることもできる。

### 『ひめゆり戦史』（1979年5月放送）

森口は沖縄の人たちの戦争体験を取材した番組を7本制作しているが、これらの番組群では戦争を行った日本軍や本土からきた教育者などの在り方が鋭く問われている。NNNドキュメント'79『ひめゆり戦史・いま問う国家と教育』（1979年5月13日放送）で森口は、傷病兵の看護を命じられ、最後まで軍と行動をとともにして211名もの女生徒が戦死した「ひめゆり学徒隊」<sup>21)</sup>の生存者たちを取材した。森口は34年ぶりに行われた「卒業式」を契機に20人以上にテレビカメラの前で証言してもらい、60分の番組にまとめた。それは戦後すぐに製作されて大ヒットし、リメイクもされた映画『ひめゆりの塔』<sup>22)</sup>が描いたヤマトの目線からの「乙女たちの殉国美談」とは程遠い、友だちの惨たらしい死や野獣と化した日本兵の醜さを伝えるリアルな戦場の姿だった。森口は、中にはいまな



NNNドキュメント'79  
『ひめゆり戦史・いま問う国家と教育』

おトラウマに苦しみ、人前に出られない生存者がいることも伝え、闇の深さを暗示している。

森口は彼女たちを戦場に動員し、死に追いやった大人たちの責任も追及した。春休みで八重山の実家に帰省中の生徒まで無理やり学校に戻して従軍させた本土人の校長は、学徒隊とは別行動をして捕虜となって生き延び、勲章ももらい、本土で大学の先生になっていた。森口が東京の自宅を訪ね責任を追及すると元校長はカメラに手をかざして撮影を拒否、画面はストップモーションとなるが、森口はデンスケ（録音機）を回し続けた。校長は「軍が強引に決めたことで、逆らえば自分も殺された」と言いわけする。そこで第32軍の元参謀に聞くと「あれは県が決めた」と言う。県の元幹部は「軍が要求した」と言い、三者は責任のなすりつけ合いを繰り返す。

森口はこの取材で一番知りたかったことは「僅か15歳から20歳に満たない幼い少女たちがなぜ戦争に駆り立てられていったのか。いったい何が、誰が彼女たちを戦場に引き込んでいったのか」であったという<sup>23)</sup>。森口はその答えを＜教育＞と軍国主義教育を忠実に実践しようとする＜教師たち＞に求めた。沖縄ものに限らず、学校や教師は森口の番組に何度も登場する。生まれ育った実家が幼稚園であったこと、学校は森口にとって琴線に触れる対象である若い人が育つ場所であること、そしてそこは国家の意志が働く＜政治の前線＞であることが、その理由として考えられる。

### 『空白の戦史』（1980年11月放送）

『ひめゆり戦史』の翌年に制作されたNNNドキュメント'80『空白の戦史・沖縄住民虐殺35年』（1980年11月2日放送）は森口の重層的な思考が埋め込まれた番組である。

番組の舞台は沖縄本島北部の山中。主人公は戦時中そこで起きた日本軍による住民虐殺に関わった元日本兵のM。彼は、番組取材当時は奇しくも『ひめゆり戦史』に登場した元校長と同じく東京の大学教授だったが、取材拒否した元校長と違い、森口の説得に応じて沖縄へ飛行機で向かい、事件のあった村への同行取材に応じる。Mは沖縄戦末期にこの山中に逃げ込んだ部隊の一員で、部隊の兵士たちは近くの村の住民が彼らの存在を米軍に密告するのではないかと恐れていたという。日本兵たちは村に降りてきて住民を浜辺に集めて手りゅう弾で殺傷、その後3人の男たちを拘束して山中に連行してスパイ容疑で「処刑」殺害した。Mは暴風の日にもかかわらず、殺害現場を探して森口ら取材チームと密林を歩く。そして場所を特定した後、森口の案内で殺害された3人の中の1人の遺族の家を訪ねる。Mは「処刑」された男性の息子の嫁と対面、義父の命を奪ったことへの謝罪をし、殺害の模様をくわしく伝える。翌日、Mはその嫁を山中の「処刑」現場に連れて行く。嫁はそこで遺骨を掘り出そうとするが適わないため、代わりに石を拾う。

注目すべきは、この場面で番組のナレーター



NNN ドキュメント'80  
『空白の戦史・沖縄住民虐殺 35年』

がそれまでの男性の声（伊藤惣一）から女性（此島愛子）の声に替わる場所。通常は番組でナレーターが替わる場合、役割分担など視聴者にも理解できる理由がある。だがこの場合、表面的には読み手が替わる理由はない。あるとすれば、スパイ容疑で殺害された住民の「処刑」場所という凄惨な場面に温かみのある女性の声で〈救い〉をもたらしたい、という森口的心情だ。それは35年も人知れず山中に放置された義父のさまよえる魂を、石を拾うことで持ち帰り、葬ってあげたいという嫁の心情に寄り添うものであったろう。古くから女性が神々や死者の声を聞き取り、思いを媒介して世に還してきた沖縄の風習を知る森口ならではの演出だった、というのは穿ち過ぎだろうか。

『空白の戦史』が森口の番組制作史の中で重要な意味をもつのは、「住民を処刑した」加害者がテレビに登場し、被害者と対面して謝罪したことであり、さらにそれを媒介したのが取材者の森口自身だったところである。森口は元日本兵Mの存在を前作NNNドキュメント'80『戦争を知っているか・芭蕉布織る村にて』（1980年8月10日放送）の取材で知り、会いに行つて沖縄に謝罪に向かうことを説得したのだ。

この番組に出ることは大学教授として地位も名誉もあるMにとってはリスクをとまなうことだった。案の定、放送後Mは様々な非難に晒された。だがMの身を案じる森口に対しMはこう言ったという。「あなたに出会えたことが私はうれしいのです。（中略）私なりに沖縄や戦争の意味を考えることができるようになったことを私は感謝しているのです」<sup>24)</sup>。

その言葉は17年前の『乾いた沖縄』放送後に取材先から受けたクレームが棘のように心にささっていた森口にとって救いとなった。テレ

び取材においても、一方的に「撮る側」が「撮られる側」から収奪する関係ではなく、相互に得るものがあり、信頼できる関係を築ける可能性があることが示唆されたからである。この番組で、通常の取材者の規を一歩踏み出した森口の行為により、殺害された男性の遺族は真実を知り、空白になっていた時間をようやく埋めることができた。元日本兵も肩の荷を下ろせるようになった。さらにもう一人の犠牲者の遺族も名乗りをあげるようになった。森口の取材を通して、闇に葬られ、さまよっていた住民虐殺事件が〈歴史〉として刻印されたのである。

## 現実に介入して島の未来を拓く

ただ現実を「客観的」に調査するのではなく、調査者が現実に介入して、当事者と共により良い方向へ導くアクションを起こし、得られた成果を共有することを目指す新しいスタイルの研究方法を、最近の社会学では「アクション・リサーチ」と呼んでいる<sup>25)</sup>。これまで支配的だった「研究者は現実に影響を与えてはいけない」という思考から脱却する「新思考」として注目を集めている。

森口は研究者ではなく取材者だが、『空白の戦史』でこのアクション・リサーチ的手法を垣間見せたということができる。そして1980年代に鳩間島を舞台として連作された番組群の中でも、この手法を使っている。

具体的にいえば、鳩間島では本土復帰後の止まらない人口流出の中で、小学校、中学校の廃校を免れるために島の外から子どもを呼んで学校を存続させてきたが、その舞台裏で森口自身が動いていたのである。

森口にとって鳩間島は沖縄に移住した年、

1959年に初訪問して以来、今日まで半世紀以上も通い、すべての島民と付き合いのある「親戚」のような島である。その間、多くの島民の離島を見送り、また無医村がゆえに島の老人たちの病気の発見が遅れ、早すぎる死を迎える現場に立会い、何度も涙してきた。

最初に番組にしたのはNNNドキュメント'74『世乞い・沖縄鳩間島』(1974年4月28日放送)。八重山の西表島のすぐ側の周囲3.4キロの鳩間島は本土復帰から2年たっても水道も電気もない。それにもかかわらず、日本政府は復帰記念事業として島では使えない電気冷蔵庫を寄贈。一方、琉球政府時代には派遣されていた医者がいなくなった。昭和初期にはカツオ節工場もあって860人いた島民は23人にまで減った。とりわけ本土復帰後減少に拍車がかかり、2年間で6家族22人が島を出て行ったという。進学のため、就職のため、島の生活の苦しさゆえに、船に乗り島を出る人々との別れの場面のもの哀しさ。この時点で中学校は廃校、小学生はたった一人だけになった。

8年後に作ったNNNドキュメント'82『島分け・沖縄 鳩間島哀史』(1982年5月16日放送)の頃になると、本土から渡ってきた青年たちが農業で島おこしをはじめ、島の人口は39人まで回復していた。しかし子どもは相変わらず少なく、小学生は農業青年たちのリーダーの娘・紫麻ちゃんただ一人。その紫麻ちゃんも親の考えで隣の西表島の学校に転校することになった。区長ら島の重鎮たちは慌てて郵便局長の孫の勇生くんを石垣島から呼び寄せる。そして6歳の勇生くんが一人では寂しいだろうと、区長の孫の美加ちゃんが沖縄本島から呼ばれてくる。二人の子どもは本音では友だちがたくさんいる大きな島に戻りたいと思いつつも、大



人たちの気持ちを気遣って口に出さないところが痛々しい。結局美加ちゃんは沖縄本島に戻り、勇生くんは一人ぼっちに…。

この危機を救ったのが森口だった。森口は区長や公民館長などの頼みを受けて、知人が園長をつとめる沖縄本島にある養護施設とのパイプ役となり、そこに暮らす親のいない子ども4人を鳩間島に連れてきたのである<sup>26)</sup>。NNNドキュメント'84『あけもどろ・沖縄鳩間島10年目の春』(1984年5月27日放送)では、この4人に神奈川からUターンした郵便局長の息子一家の子ども2人、西表島から戻った紫麻ちゃんなどを加えて、島の子どもは一挙に10人に増え、中学校も復活、島の人口は57人に膨らんだことを伝えている。



勇生くんと美加ちゃん(鳩間島1982年)  
～森口豁写真集『さよならアメリカ』より

「あけもどろ」とは「夜明け」を意味する島言葉。そのタイトルどおり、この番組放送後、島に里子にくる子どもは絶えなくなり、その中には新聞やテレビで知って、自分の意志で本土からやってくる子どももいた。元の学校になじめない、友だち関係がよくない、教師に見捨てられた、親と居たくないなど、学校や家庭から排除された子どもたちだった。森口は、経済成長の陰で教育や家庭が荒廃してゆく日本の

姿が、鳩間島の現実の中に映しだされていると指摘している<sup>27)</sup>。

森口はもう一つ、鳩間島に貢献している。著書『子乞い—沖縄・孤島の歲月』(凱風社2000)を原作にテレビドラマ『瑠璃の島』が制作され、2005年4月から6月まで10話にわけて日本テレビ系列で放送されたのである。親に棄てられて施設で育った少女・瑠璃を当時中学1年生だった成海璃子が演じ、郵便局長がモデルで里親となる島の男を緒方拳が演じたドラマは反響を呼び、その後鳩間島にくる観光客はそれまでの10倍以上、年間3,000人に増え、それまで3軒だった島の民宿が10軒になったという。

考えてみれば、1959年、単身沖縄に来るときに森口の胸の中で燃えていたのは「報道の力で沖縄の現実を変える」ことだった。アメリカの軍事戦略の拠点であり続ける沖縄の基地問題は、50年かけても変えることはできなかった。だが、消えかかった八重山の小さな島の灯火は、なんとか守ることができた。そんな感慨が今年75歳になった森口の心の中にあっても不思議ではない。

もちろん、鳩間島に住み着いた農業青年たちが批判するように、子どもを外部から連れてきても対症療法に過ぎず、島の産業を起こして若者が島に定着し、子どもが生まれる環境を創りだして初めて過疎は解消される。そのことを森口は十分に理解している。だが高校3年生のとき、初めて沖縄の現実を知り、「何としても早く沖縄を本土に復帰させて救いたい」と身一つで沖縄に飛び込んだ森口豁にとって、目の前にある島の現実にコミットせずに、他人事のように報道し続けることは、「できない相談」だったに違いない。

## おわりに

森口豁は初志を貫徹した稀有なテレビ・ディレクターである。それがなぜ可能であったかを探るのが本稿のテーマであった。

限られたページ数に応じて引用番組を限定して分析した結果見えてきたのは、その「頑固一徹」なイメージとは裏腹に、差し迫る状況の変化に応じて、「沖縄」という取材対象の揺れ動きを柔軟に察知し、カメラのレンズを標準から広角、望遠へと切り替えるが如く、認識と関係の仕方のアタッチメントを増やしてゆく森口の姿だった。

『沖縄の十八歳』に代表される対象と同一化して本土にもの申すスタイルから、東京転勤後、周囲の冷たい視線にもかかわらず、機を見ては歴史軸に入って掘り下げていったヤマトと沖縄の関係論、そして定点観測地とした鳩間島を舞台にしたアクション・リサーチ（島おこし）の如き関係の構築と展開。本稿で取り上げた範囲だけでも、沖縄を前に真剣勝負、試行錯誤を続ける森口の姿が浮かび上がってきた。

そして内間安男という一人の青年の人生を追う、鳩間島に50年通ったように、一点を長年にわたって凝視して番組を重ねていくことで、やがて点は線となり、森口は自分の目を通した沖縄の現代史を紡ぎ出すことに成功した。

しかし、一つの対象に長年にわたり関わることは、ともすれば、惰性に身をゆだねて隘路に陥りやすい。森口がそうならなかったのは、絶えず自らの認識のアンテナの感度と精度にこだわり、点検を怠らなかつたからに違いない。そのストイックなまでの自省と緊張が持続したのは、高校3年生のとき初めての沖縄を前に感じた「居場所のなさ」を自分のポジションとして手

放さなかつたからであろう。

居場所の構築にこだわる凡庸な生を遠ざけ、心に刻まれた青春の原点を出撃拠点とし続けた実直さ、誤解を恐れずにいえば「青臭さ」こそ、森口豁が森口豁となったゆえんだったのだと思う。

(ななさわきよし)

## 注：

- 1) 東京国立近代美術館編『沖縄・プリズム 1872-2008』
- 2) 七沢潔「記録された沖縄の“本土復帰”」(『放送メディア研究』No.8 P.36)
- 3) 萩元晴彦、村木良彦、今野勉『お前はただの現在にすぎない—テレビに何が可能か』(田畑書店 1969)
- 4) 森口豁『沖縄こころの軌跡—1958～1987』(マルジュ社 1987) P.8
- 5) 森口豁『沖縄 近い昔の旅—非武の島の記憶』(凱風社 1999) P.10
- 6) 同上 P.10
- 7) 森口豁『ミーニシ吹く島から—極私的沖縄論』(アディン書房 1980) P.72～74
- 8) 同上 P.7～10
- 9) 写真展「さよならアメリカ」での森口豁スピーチ (2010年5月15日 沖縄・南風原)
- 10) 森口豁ヒアリング(2010年6月17日 東京・北千住)
- 11) 同上
- 12) 注7と同じ P.117～118
- 13) ALTERNATIVES 2008年9～10月号 P.60
- 14) 森口豁ドキュメンタリー作品集『復帰願望—昭和の中のオキナワ』(海風社 1992) P.74
- 15) 注14と同じ P.61
- 16) 同上
- 17) 高橋和己・全エッセイ集『孤立無援の思想』(河出書房新社 1966 / のちに旺文社文庫)
- 18) トークイベント『肝苦り結歌』での森口豁の発言 2010年6月12日 東京・渋谷 UPLINK-FACTORY
- 19) 仲里効『オキナワ、イメージの縁(エッジ)』(未來社 2007)
- 20) 西谷修・仲里効編『沖縄／暴力論』(未來社 2008)
- 21) 沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の職員・生徒が看護要員として沖縄戦に従軍。
- 22) 今井正監督『ひめゆりの塔』(1953年公開)、舛田利雄監督『あゝひめゆりの塔』(1968年公開) など
- 23) 『ドキュメンタリー 20年 私の“沖縄表現雑考” 第3回』琉球新報 1984年8月8日号
- 24) 同上『第4回』琉球新報 1984年8月9日号
- 25) 社会心理学者 Levin.K が提唱、望ましいと考える社会的状態の実現を目指して研究者と研究対象者とが展開する共同的社会実践のこと。
- 26) 森口豁ヒアリング (2012年3月28日 東京・池袋)
- 27) 同上